
想空のガラクタ

宇佐美初葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想空のガラクタ

【Nコード】

N7197Y

【作者名】

宇佐美初葵

【あらすじ】

「ガラクタはゴミじゃないの。たとえ世界に1人だとしても、それを必要とする人はいるからね」ガラクタを拾い集める奇妙な少女、汐里はそう言った。2009年の夏休みの最中。記憶喪失を抱えた少年は、窮屈な病院から抜け出すたびに汐里に絡まれてしまう。その際に彼女の知られざる秘密を知ってしまった少年は、自分の在り方を見つめ、徐々に抜け殻だという意識を薄れさせていく。

【 0 潮鳴りに始まる】

私はガラクタを集めている。

誰もが価値を見出さないモノ 欠落していたり、値打ちがなかったり、あるいは未使用だったり それを、せっせとかき集めるのが私の日課であり習慣だ。

適当に歩きまわって拾うだけけど、その日にしか巡り合えない物がほとんどで、昨日じゃ、明日じゃ手に入らないのだと思うと嬉しくなったりする。

……のだけど。これが中には汚らわしいと感じる人や、ゴミ拾いの何が楽しいのだとあざ笑う人もいる。私は周囲との認識の差をなかなか感知できない人間らしく、非難の目を向けられる理由に時間をどうしても要してしまう。その結論を解くと、私はヘンな子みただ。

うん。そこは甘んじて受け入れよう。なんて思うわけなのですが、一つ見逃せない言葉があったりします。ガラクタは断じてゴミじゃありません！

私からすればこの二つは黒と白……は言い過ぎにしても、灰色と黄土色くらい違いがある。わざわざ口で説明する事はなくても、他の人に見してみれば差異なんてないに等しくても、それゆえ私は明確にガラクタと呼ぶのだった。

八月五日 晴れ。

私はこの日、たゞいへんなガラクタと巡り会った。ガラクタ集めは人目につかない夜中から始めるので、順を追うとそれは昨晚のメルからになる。

なんて事はない。中等部から四年の付き合いになる紗依ことサヨちゃんから、明日はめいっばい遊ぼうというお誘いがかかったのだ。夏休みに入ったや否や、私はサヨちゃんとこれでもかというくらい

遊んでいる。珍しい事でもなく、素直に私は喜びの意を表した。

翌日になって、あまりの強烈な日差しに私たちは同時に顔をしかめた。

朝から爽やかとは無縁の蒸し暑さを演出してくれる水無市は、都会の喧騒とはやや離れた位置に在している。市名と反して汀がおおいたため海風が吹いてくれるので、地面から立ち上る熱気はさほど気にならない。けれど涼しいとは言えないぬるい微風なため、素直に嬉しいとは思えなかつたりする。

どこに向かうかはいつも適当で、サヨちゃんと私は気ままにブラブラしながら、その方角の先にある浜を最終目的とした。市の中央から東に五キロばかり進むと浜辺があつて、道中にはクーラーの効いた書店やら服屋やらコンビニやらが魅力的に点在しているので、寄り道ばかりしていると浜辺に到着したのは夕方になつたくらいだった。

『いつやー、ここに来るまで長かつたねー！』

ほんとほんと、と私はサヨちゃんの言葉に相槌を打つ。楽しければ何でもいいやーみたいな大雑把な性格をした彼女とだから、私は気が合うのだろう。一緒に波際に駆け寄つて、陽が暮れるまでバカみたいに水をかけ合う。人目を気にせずきゃーきゃー言い合う光景は客観的にはアホな女の子たちに映るだろうが、それがすつごく楽しかった。

そうそう、合間に私は足元に落ちている物を拾つてみたりもする。サヨちゃんには笑われて、またか、なんて言われて。いいじゃん、なんて思つて。

まあ笑われるのは仕方ないかもしれない。けれど、

『はい、これ。好きでしょうよ、汐里に贈呈しよう！』

などとのたまうサヨちゃんの手にはコンビニ二袋が提げられていた。中身は開封済みのお菓子の袋で、驚いた私は顔をあげると、サヨちゃんの意地の悪い笑みを目にした。

いやあ、これはひどいよねー。

ゴミとガラクタは違うの！ と私が再三言ってきた言葉で抗議すれば、はいはいわかったんだよー、と引き下がってくれる。ただおそらく、言葉自体は伝わってない。

今更サヨちゃんにどうこう言うつもりはないけれど、さすがに自分のゴミを渡してきて『好きなんでしょ』な雰囲気だしてくるのはどうかと思います。冗談なんだろうけどね。

遊び疲れてサヨちゃんがギブアップ宣言したところで、本日は解散。また今度も遊ぼうねー、と次の約束を取り付けた後、私たちはそれぞれ帰路につく。

木造アパート、家賃四万円の借家が私の帰る場所だ。外観は相当錆びれているけど中はまだまだ立派なもの。自宅に着いた私が真っ先にするのは、台所で湯を沸かしてカップヌードルをこしらえる事で、注いだヌードルを窓際に持って行き、後は景色を眺める。

あかね色の空だった。それが澄んだ藍色へと移り変わる刻の流れがよくわかる。時間に身を任せるのも、ヌードルの三分を待つのも、併せて私は好きなのだった。

それに待つのは三分だけじゃありません。

一日のほとんどの終わりは、私にとっての始まりだ。ガラクタ集めという習慣はこれからのだから。

午後八時半過ぎ。

そろそろ出かけようかという時間帯に、サヨちゃんから着信が入った。

『汐里つち、あたしの髪留め拾ってない？ 落としたみたいなんだよ〜。(。>)<』

あらー。文面に目を通して私はため息をつく。

サヨちゃんは外を出歩くと何かとよく落とす。うっかりとか、抜けているとか、注意力が散漫していたりとか、そんな子なのだ。過去一度、サヨちゃんが落とした物を私が偶然拾っていて感謝された

事があるらしい。私は記憶にないんだけど。で、その件以来、サヨちゃんは落とした自覚があっても、関係の薄い私に訊ねてくるようになった。

『ごめんね、拾ってないよ。どんな感じの髪留めなの？』

送信ボタンに指をかけて、ちよっぴり考える。

『もし見かけたら拾っておくね。期待はしないで、だけど』

そう追記してから送信する事にした。

というのも、髪留めの行方は私たちが歩いてきたルート上に落ちているはずなので、本日のガラクタ集めのポイントをあの浜辺にすれば、どちらか探せて一石二鳥じゃありませんかと思つたワケなのです。立ち寄つた店内に落としたならどうしようもないけど、

『ホント！ いやあ探し物には汐里だね〜！ 助かるありがとう！』

そんなサヨちゃんの返信をみて俄然やる気になった私は、いよっしやー探してやりますかと気合を入れていそいそと玄関をでる。…

…ちなみにサヨちゃんは私が深夜徘徊する事を知らないので、まさか今晚のうちから探そうとは思つまい。

「いつてきまーす」

自宅から浜辺までは案外距離が近い。ルートのいくつかを候補から外していくと、自転車じゃなくてもそれほど時間はかからない計算に至つた。

夜中逍遙から五分後くらいに新たな着信が入つた。相手は予想どおりサヨちゃんんで、髪留めの画像を添付してくれていた。中指くらいの長さでリーフ模様の形をし、小さなパールが雫を模しているキラキラしたヘアピンだった。うわあ、綺麗だなあと同時に、こんなヘアピンをした事に気づけなかつた私の女子力が恥ずかしかつたり……。

髪留め、見つけたら渡す時にさりげなく褒めておこう。やっぱりこれ可愛いよねー、みたい。サヨちゃん見た瞬間からずっと思つてましたヨ、みたい。な。

けれど肝心の髪留めは一向に見つからず、息切れの予感がしてき

て、辺りは潮の香りも濃厚になっていて、携帯開くとかれこれ一時間経過していたりして 推測に過ぎない考えが徐々に確信に変わってくるのを私は感じ取るのだった。

きつと砂に埋もれてるんだろうな、って。サヨちゃんとアレほどはしゃいだのだ。髪留めが外れ尚且つ落ちた事に気づかない場面は、水をかけ合つたあの時しかないと思う。

それに私は視力には自信があつて、自分でもびっくりなくらい夜目がきく。街灯一つない真つ暗闇の通りでも十メートルは明瞭に見える。見落としてはたぶん、ない。

だからきつとおそらく……そんな希望的観測も含めて浜辺の砂の上に降り立つたのですが、真つ先に私はたいへんなガラクタを見つけてしまったのです！

淡い月明かりにぼうと浮かび上がる青い布。潮風にたなびく光景はまるで炎のようにゆらゆら揺らぎ、そこに埋もれる影には微かな生命を感じさせる。普通ならそれはガラクタとも、ましてやゴミとも呼んではいけない存在だった。

そう、それは紛れも無く人間なのだった。波際付近の柔らかい砂の上に倒れる姿は、なんだか呼吸も乱れてしんどそうな様子だった。「大丈夫、ですか？」

ああ、けれど私はどうしてガラクタと思つたのか。

風に流されて聞こえないくらい小さな呻き混じりの吐息。

声に反応してあげたその顔には、なにか、決定的に欠けたものを感じさせた。

夢を遠くから眺めていた。

そこに幸福という未来はなく、砂の粒くらいの癒しが現在いまあるだけ。登場人物の男女はそれでも笑顔を絶やさずに永遠の幸せを願っていた。

つまらない劇は唐突に終わりを迎える。

紅い弾幕が垂れ下がり、主役は一般人へと成り下がっていった。

それは、布切れがこすれ合うような音だった。

かすかな音を拾った俺の耳は、その後なにも拾わなくなった。

無音だ。そのくせ消毒液のツンとする臭いが鼻腔を刺激する。目蓋の重さは目覚めるのを拒んでいるかのようだ。このまま委ねてしまおうか。それに身体が鉛のように重い。

しかし時間が経つに連れ、俺の耳は鋭敏になっていく。壁か窓を隔てているのか、くぐもった声が遠くの方で聞こえてくる。そしてもっと近くの位置では、先程よりも小さな空気の音。自然なものはなく、俺はそこに人の気配を感じ取る。

「お目覚めですね。おはようございます」

掠れた女性の声だった。連想させるのは擦り切れたビデオ音で、無機質に鳴るだけのソレと似ていた。爽やかな言葉でいて柔和でなければ感情の切れ端さえない。

思い切って目蓋を開くと、べったりとした白だけがあった。霞んでいる。その考えに至るまでに数秒を要し、何度も何度も瞬きを繰り返してみる。

「憶えていますか。昨夜のことは」

首をわずかに右に傾げると四十代ほどの女性と目が合った。化粧気がなく、くたびれた印象の表情には深く皺が刻まれている。窓越しの日差しを背に俺を静かに見つめていて、見つめ返すとその皺が一層深くなった。……誰だろうか、見憶えがない。

ぼーっとする頭の中はまるで空洞であるかのようだ。

ついでにぐるりと視界を見渡す。ヒトから物へ。花瓶に生けられた花は紅色。天井と壁は白色だが、前者は漏水の影響なのかシミが目立つ。そして水色のカーテンと滲んだあかね色の空に目を移し、また物からヒトへと戻す。

表情ひとつ変えない女性は言葉を継ぐ。

「どうやら憶えていないようですね。忘れているのか、脳内が忘却させたのか。貴方は記憶喪失しているのですよ。半年の眠りの末、昨夜ようやく目を覚ましました」

……きおく、そうしつ？

そう訊ねようとしたが、乾いた唇同士が張り付いて上手く言葉が出なかった。しかし意思が女性にはちゃんと伝わったのか、それとも初めから答えを予想していたのか、

「そう。貴方は記憶喪失になりました」

諭すような言葉だった。

なんて現実味がないのだろうか、と思う。それは言葉の意味を指した感想ではない。かつて記憶した事柄を取り出そうとしても、白いモヤがかかったみたいに上手く思い出せないのだ。その為にまず記憶喪失という言葉の意味を検索する必要があった。それは単純な一桁の足し算をわざわざ数字の組み合わせから考えていくのと似ている。

まるで自分以外に向けられた言葉のような錯覚。

それに聞き耳を立てているだけのような感覚。

現実味がなくて、でも紛れも無くこれは他人事ではなかった。

不意に、夢の中で眺めたつまらない劇が思い浮かぶ。

これだけはあつさりと再生できるようだった。

「まだ混乱していますね。無理もありません。では私は医師を呼んでみます」

ギツと軋む音が響いた。

女性は立ち上がると扉を開けて視界の端に消えてしまう。

数分の後、慌ただしげに床を叩く足音が近づいてきた。

瞬きの回数を数えていたところ、ちょうど七十八回目で扉が開かれる。

現れた医師は白衣に眼鏡の若者で、歳は二十後半から三十前半というところだ。「調子はどうか」という挨拶から始まり、幾つかの質問を投げかけてくる。俺が適当に答えると、意味深な唸りを発しては手元の紙に何事かを記述を残していた。

「きみは間違いなく記憶喪失だね」

その言葉は何度目だろうか。もう聞き飽きた。

「それも生活史健忘のようだ」

「……？」

俺が聞きなれぬ言葉に首を傾げると、わざとらしく「ああ、それはね」と前置きし、

「簡単に説明すると、自分の事や身の回りの出来事を忘れちゃうんだ。程度は人によるけど、きみは自分の名前も、年齢も、性格も、家族も、生活習慣も　つまりは全て忘れてるようだから、全生活史健忘という事になるが」

ああ、そうそう小説なんかではよくある設定だね、今度読んでみるかい　なんて事を飄々と言つてのける医師は、果たして神経がマトモなんだろうか。

「とりあえず一日置こう。昨夜は目を覚ましたのが一瞬で何も覚えてないみたいだし、説明でいまは整理も必要だろう。何かあればそのボタンを押してくれ。すぐに看護婦が飛んでくるようになってるからね」

それじゃあね、アンザイトモヤくん。

真っ白な部屋には誰もいなくなった。医師が口にした最後の言葉が、ごろつとしたまま頭の中に残った。肉じゃがを噛み砕かないで食べようとし、口の中に残った、みたいな。

アンザイ、トモヤ。

聞き慣れない。検索するも該当なし。知らない言葉だった。

「
」
だからこそ、ようやく記憶喪失を実感した。いまの文字列は俺の名前なのだろう。一つの例外を残して決して忘れる事のないそれを、俺は忘れていたようだった。

突如として明らかになった空白に、俺は、すでに恐怖を感じていた。

確かに世界は、俺を置き去りに進んでしまったらしい。

二〇〇九年、二月七日。

安斎友哉、男、十七歳は原因不明の昏睡状態に陥った。

自宅付近の空き地で倒れていたところを発見されるも、雪に埋もれていた為に数時間が経過し、彼の身体は冷え切っていた。救急車で病院に運ばれ処置を施されたが、彼に目が醒める気配はなかった。そのまま半年もの歳月が流れ、絶望的だと判断された矢先に意識を取り戻した。ちなみに彼には目立った外傷はなく、両の手にかすり傷があつたくらい。

「ここまではいいかな。気分は大丈夫かい？」

「はい」

翌日の朝だった。またも眼鏡の若い医師が入室して、医師らしかぬ軽快な語調で話し始めた。それはアンザイトモヤと呼ばれた男の過去の話だった。

耳を塞いでやりたくなつた。嫌な話題だ。俺にとって彼は知らない人物で、その彼の事を無理やりに聞かされている。彼はかつてのお前だと。しかし、だからどうしろというのだ。

「俺、中学生じゃなかったんですね」

奇立ちが眼鏡医師に向くのを感じて必死に堪える。目を落としたシーツの上には、枯れ木のように細く脆い腕があった。せめて俺の話をしてくれ、と。

「そうだね。半年も寝たきりじゃ細くもなる」

でも、何を口にしても無駄らしい。なら目を伏せてもうなにも喋らまい、と口を閉ざした俺に眼鏡医師は何を勘違いしたのか、優しさを意識した言葉を掛けてくる。

「心配はないよ。安齋くんには午後から身体を動かしてもらおう。社会復帰だね。いまはまだ不自由だけど徐々によくなるし、また筋肉もついてくる」

その物言いがこちらを真に氣遣っていない事くらい容易に判断がついた。豪華な額縁にダサイ絵が入れられたような滑稽さだ。馬鹿馬鹿しい。

用意された枕詞に俺は頷いてやると、眼鏡医師もまた満足そうに頷いた。

「君はこう言ってはなんだけど、奇跡の生還を果たしたんだ。たぶん、まだまだ生きる運命にあるんだろうね。医師としては無神経すぎる言葉かもしれないが、幸せ者なんだよ」

無神経なのは前からだと言いつうになつた。

幸せ者。果たしてそうだろうか？

生まれたばかりの俺に、その判別はつきそうになかった。

社会復帰は日を重ねる毎にハードになってきた。午後だけじゃなく午前にも組み込まれ、リハビリテーション室という捻りのない部屋でひたすら身体を動かした。側には理学療法士とスタッフが一人付いて、励ましにも慰めにも聞こえる言葉をぽつぽつと掛けてくる。底抜けに明るい声なのは熱意を込めて取り組んでいるからだろうか。こちらの動きひとつひとつに飾り言葉を付けてくるのは鬱陶しくてたまらなかった。

ただそんな甲斐もあつてか、初めはヒトの補助なしに困難だった歩行は次第に不自由ではなくなり、どうにか松葉杖さえあれば廊下を歩きまわる事が可能になった。

機械的に身体を動かし続けて一週間が経過した頃だった。

「余裕があれば、合間に院内を歩くのもいいかもしれませんね」
限定的ではあれ自由に動く事を許されたみたいだ。しかし行くあてなど当然ある訳もないので、ふらふらと彷徨う亡霊と化した。

その時にすれ違う患者はそれぞれで、車椅子に点滴という老人もいれば、腕にギプスを巻いた若者、夏にマスクという格好の子供もいる。それでも彼らは比較的症状が軽いヒトたちだ。本当にヤバい類に属するヒトは、先日までの俺のように、ずっとベッドの上で寝ている状態なのだから。いまも息も絶え絶えに苦しんでいるのだから。

なら、と思う。俺は、と。

眼鏡医師によれば回復の望みは絶望的だったらしいが、俺は死の淵から這い上がってきた。奇跡的であるらしい。記憶喪失を抱えても、紛れも無く死から遠ざかったのに変わりはない。病室のベッドに沈み続ける彼らにとっては羨望の対象となるのだろうか。

でも俺はこれを幸福だとは素直に思えない。先ほどすれ違った若者のように骨折であれば。マスクしていた子供のように風邪や熱であれば。……醜い考えを打ち切る。どう足掻いたところで変わりはないのだ。もしもなんて思っても仕方ない。ただ今くらいは、自身が不幸であることを嘆いて恐怖を紛らわしても許して欲しい気分だった。

しかし、

「あなたは幸せ者なのだわ」

不躰にも唐突にそんな言葉を浴びせられた。それはちょうどベンチに腰掛け、思考と体力回復を兼ねた休憩中のことである。

三階から一階に降りるとロビーがある。診察用の控え室を兼ねた広い空間で、長椅子が十数と列をなしている。天井には備え付けのアナログテレビがあり、診察待機中や休憩目的の患者たちの簡素な娯楽となっていた。

少し離れた位置には自動販売機が三台配備され、木製ベンチも申し訳程度という感じで隅に添えられている。俺はそのベンチに座って暫しの休憩をとっていたところ、見知らぬ声で憎まれ口を叩かれたわけだ。

「……いきなり何？」

不機嫌をあらわにして見やった先には水玉模様のパジャマがあった。踵とつま先をぴたりと揃え、手を後ろに回して伸びをした佇まいの、それは小さな女の子だ。

歳は十三くらいだろうか。焦げ茶の髪は小柄な体の胸にまで垂れており、小首を傾げる仕草で肩からさらりとこぼれる。その中で頭頂部から跳ねるアホ毛はかなり印象的だ。

声で予想はしてたものの実際に少女という姿を目にして、こんな男に何の用なのだと、啞然として俺は見つめ返した。

「わざわざあなたに逢いに来てあげたの」

「くい」と整った眉を持ち上げて笑う表情に、嫌な思考がよぎる。

俺には見憶えのないヒトである。しかし彼女の言い方ではまるで、

知り合いに逢いに来たかのような言い方だ。俺が思い至るのは、安斎友哉の知り合いであるという可能性で。

「俺の知り合いなの、か？」恐る恐る訊ねる。

「？ ーん、違うわ。初対面」

あ、違ったのか。余計な気を張ってしまった。

アホ毛娘のその返答にひとまず安堵するも、

「あなたの事はここじゃ有名だから。生き返ったんですってね」

「ん？ なんで知ってるんだよ」

「有名だからと言ってるじゃない。あなたアホなのね」

年下の娘にアホ呼ばわれされてしまった。これはすこし屈辱的だ。言い返そうか、それとも有名になっている事について問おうか迷っている、また言葉を継いでくる。

「それなのにあなたは、ちっとも喜ばないから。不機嫌そうな顔してる。わたしはいいいけど、みんなが不憫だわ。どうしてあなたみたいな人が奇跡に恵まれるのかしら。病院はね、抜け出すか沈んでいくかの両極端な選択肢しかないのだから。だからもっと必死にもがきなさい」

「……随分と偉そうだな、きみは」

言葉を探して、結局そんな話の逸らし方しかできなかった。

どうして俺はこんな娘に説教なんかされているのだろう。

「わたしは、おかしい事をおかしいと言ってるだけだわ」

「それでも、初対面に向かっていう台詞じゃないだろ」

「ならいつ言うの？ もっと親しくなってるから？ それとも隠し事をしないって約束を交わす間柄にまでいっちゃう？ でもわたしは、そんなのおかしいと思うのだから」

「まあそう……だけど、タイミングというか、そういうのもあるだろ」

「タイミング？ ーんなのは知ったこっちゃないわ」

ひらひら手を振ってアホ毛娘は鼻を鳴らす。俺は言葉に詰まって唾を飲み下した。

その堂々とした物言いに言葉を返せなかった。手を振る仕草の後に『言いたい事はすぐ言うのが一番なのだわ』という言葉がくっついて来そう、不覚にも、その言い分にも一理あると思ってしまう。たぶん俺は、年下の小娘に言い負かされたのだ。

確かにこのアホ毛娘、言葉遣いはとても見た目に相応だとは思えない。人見知りせず堂々としている。でもそう言った面が逆に子供っぽさを象徴してもいた。俺のような男に警戒心なく近づいて、こちらの事情をお構いなしに喋るところなど、特に、

「ガキっぽい」

呟いた一言に、アホ毛娘は過敏に反応した。

「ななっ、なんですって！ わたしはガキじゃないわっ。歳は十四五ですこし成長期が遅れ気味かもだけど、むむムメもないけど立派なおトナ途中なの。撤回を要求するのだわ！」

「い、痛いからっ」人の膝をぱしぱし叩いてくるなっ。

それとムメってなんだよ。

「うるさーいっ、あなたなんかもっとながればいいのだから！ これもリハビリ、社会は苛烈に極まらないのだから鍛えておくべきなのよっ」

「……はいはい俺が、悪かったよ。きみはガキじゃない」

ふーっ、と息荒く襲いかかってくる娘をなんとか宥める。

「はあ、べつに分かればいいのだから」

トン、と一歩半下がると手の甲で肩にかかる焦げ茶の髪を払いのける。視線を一刻だけこちらに流すと、顎を下げて神妙な面持ちで何事かに耽りだした。

背もたれに体重を預けて一息つく俺の心境は『面倒くさいものに絡まれた』。

これ以上、何か言われないうちに逃げた方がいいかもしれない。

我慢して大人の対応するのも苦ではあるし、それが得策のように思うのだ。

「そうね」

アホ毛娘は考え事の最中だ。今のうちに立ち去ろうとしたその時、
「わたしも大人気なかったのだから。トモヤはわたしよりずっと年下
なのだから」

うんうん、と頷く娘に俺は口を開かずにはいられなかった。

「おい、誰が誰より年下だって?」

「んー? そんな単語一つ一つを強調して問わなくても、何度でも
言っただけだから安心しなさい。『トモヤ』は『わたし』よりずー
っと年下なのだから、大人気なかったと言ったの」

「どこがだよっ、おまえ十四だろ? 俺は十七だよ、歳上だよ!」

このアホ毛娘の目は節穴じゃなかるうか。瞳は黒インクで塗りつ
ぶされただけで、実は一切合切まったく何も見えてないんじゃない
だろうか。見た目で分かるだろうに。

ただ困った事に、彼女の表情は幼い子を見つめる親のような慈愛
に満ちていた。

「なに言ってるのかしら。あなたはまだ生まれて一週間じゃない」

「いやそれはまた別だろっ、というか、なんでそれ知ってるんだよ
そういえばコイツは俺の名前も知っているようだ。」

訝しむ俺に、アホ毛娘は得意げな様子だった。

「だから有名と言ってるじゃない。わたし廊下とか結構ウロウロし
てるから、看護婦たちが噂してるのも耳にしちゃうの。そしたら生
き返った少年の話で持ちきりだったわ」

なるほど。

「それで暇を持て余したお嬢様は、わざわざ噂の相手を見に来たと
いう事ですか。ってか、ホント暇人だな。きみも病人なんだろうに」
「心外だわ。その言い方だと、一週間が経った今になって噂を聞き
つけたみたいに聞こえるじゃない。わたしはあなたの回復の三日目
には観察してたのだから」

ない胸を張って『えっへん』と威張っている感じをわざわざ口に出
した。

いや待て。つまり俺はここずっとコイツにリハビリの様子を觀ら

れていたのか。

「ほんとムカついたわ。あなたって自分の幸福を実感してないんだもの」

「あまり、だな」

辟易としながら俺はその場から立つ。

アホ毛娘が口を半開きで見上げるのを視界の端に寄せていきながら、

「押し付けなくてくれ。確かに俺はこのとおり感情面では生まれたばかりだ。右も左もわからない。でも、だから、いまある状況も良いのか悪いのか分からないんだよ」

言いたくなかったし、こんな娘に言うべきではなかったのだろうが……言わなければいけない場面ではあった。伝わる伝わらないの問題ではなく。

無意識に唇を噛んでいた俺は、松葉杖を支えに来た道を戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7197y/>

想空のガラクタ

2011年11月21日21時29分発行